

## トランジションを起こす／能代で始まる未来への実験

谷口吉光（秋田県立大学）

「トランジション」という言葉については昨年本欄でも紹介した（15年6月17日付）。この言葉を日本語に直訳すれば「転換」となる。ある状態から別の状態に移り変わることをいう。しかし、私がここで言うのは現在の大量生産大量消費社会から持続可能な社会への「転換」のことである。

大量消費社会は絶えず経済成長を進めているが、このまま行けば地球の資源と環境容量の限界にぶつかって行き詰まり、破滅的な事態になるだろう。前回本欄で扱った異常気象の頻発はその前兆といえる。この警告は1972年に刊行されて全世界に衝撃を与えた「成長の限界」以来、多くの人が発し続けてきたが、未だに経済成長至上主義に取り憑かれた政治家や経済人は「経済のグローバル化」などを推進しながら、破滅への道を早めていると私には思える。

大量消費社会にストップをかけ、持続可能な社会に転換するためには具体的に何をどうしたらいいのだろうか。この難問に答えるべく、ヨーロッパで考え出された手法がトランジション理論である。

この理論では、トランジションは地域（たとえば市町村）で意識的・計画的に起こすことができるものであり、その主役は地域住民だとされる。私がこの理論に魅力を感じていたのは、国が変わるのを待つのではなく、地域で、自分たちの力で転換を起こすことができるという前向きなメッセージにある。

そんな気持ちを温めていたところ、京都にある総合地球環境学研究所で「実際に日本でトランジションを起こす実験をする」という野心的な共同研究が始まることを知り、縁あってこれに参加することができた。京都、長野、千葉と並んで秋田県能代市が調査地選ばれ、今年4月から正式に活動を始めている。

トランジションを起こす過程はいくつかの段階に分かれている。最初にやるのが地域の住民に集まってもらって、望ましい未来の地域社会の姿をみんなで考える「未来のビジョンづくり」という作業である。行政でも地域の将来ビジョンづくりはよく行われているだろうが、トランジションの特徴は、想定する時間軸を30年から50年先という長期的未来に置く点にある。つまり私たち自身の時代ではなく、子や孫たちが大人になって活躍している未来を考えるのである。

能代市では9月から市民の方々に集まっていただき、「未来のビジョンづくり」のためのワークショップを始めたところである。ヨーロッパなどでの研究成果を参考にしているが、なにぶん日本でおそらく初めての試みなので、焦らずひとつひとつの作業を慎重に進めている。11月までにワークショップを3回やったあと、12月5日には「能代市の食の未来像とトランジションの可能性」という公開セミナーを能代市で開催する予定である。いずれマスコミで紹介される予定だが、関心ある方々のご参加をお待ちしている。

（朝日新聞「あきたを語ろう」 2016年10月16日掲載分に加筆・修正した）